

金曜 名作館

いわさきちひろ生誕100年

松本 猛

多くの人々にとって、いわさきちひろはかわいい子どもの絵を描く童画家、絵本画家として認識されている。今年は没後44年、生誕100年を迎えて、展覧会や出版をはじめ各地で多様な取り組みが行われている。その中で、今夏、東京ステーションギャラリーで開催された展覧会「いわさきちひろ、絵描きです。」(11月16日より京都・美術館「えき」KYOTO、来年4月20日より福岡アジア美術館へ巡回)は、ちひろを「画家」として美術史に位置づけようとする試みだった。

後、画家として立つ決意をした時は油彩画に取り組んでいる。やがて紙芝居や絵本画家として活動するなかで水彩画を描くようになるが、しばらくは展覧会に油彩画を出品している。

1960年代に入り絵本画家として評価が高まってくると、出版社からの注文や制約も少なくなり、自由に描けるようになる。ちひろは、絵本画家として生きる道を選び、次第に余白が多い、にじみを生かした透明水彩の作品を描くようになった。

* * *

「窓ガラスに絵をかく少女」(1968)は自ら文も書いた絵本『あめのひのおるすばん』(至光社)の一場面、母親の帰りを待ちながら一人でお留守番をしている少女の姿である。あたりが暗くなり、だんだん不安になってきた少女は、曇った窓ガラスにひたすら絵を描いて気を紛らわす。この場面にちひろがつけた言葉は「わたしのおねがいおまどにかいた」である。少女が描いた窓ガラスの絵の右手には傘をさした

文化の話題

の絵の右手には傘をさした

「窓ガラスに絵をかく少女」

自身を投影、繊細な心 表現



いわさきちひろ 自宅にて
1973年4月(54歳)

1918~74年 画家・絵本作家。14歳で岡田三郎助に師事、後に中谷泰から油絵を学ぶ。27歳で日本共産党入党。31歳で松本善明と結婚し、翌年、長男の猛、誕生。45歳で、その年発足した児童出版美術家連盟(現・日本児童出版美術家連盟)の理事に。代表作に『ことりのくるひ』『戦火のなかの子どもたち』など

女の人がいる。おそらく待ちわびている母親の姿だろう。少女の気持ちは背後に広がる紫と青を基調とした



1918~74年 画家・絵本作家。14歳で岡田三郎助に師事、後に中谷泰から油絵を学ぶ。27歳で日本共産党に入党。31歳で松本善明と結婚し、翌年、長男の猛、誕生。45歳で、その年発足した児童出版美術家連盟（現・日本児童出版美術家連盟）の理事に。代表作に『ことりのくるひ』『戦火のなかの子どもたち』など

おそらく待っている母親の姿だろう。少女の気持ちは背後に広がる紫と青を基調とした

複雑な色彩のなかに込められている。

ちひろは、子どもを描いていると、自分の子どものころを描いているような感じがすると語っているが、この少女もちひろ自身が投影された作品である。母親が女学校の教師だったこともあり、ちひろは幼いころから、家で母の帰りを待っていた。また、曇ったガラスがあればどこでも指で絵を描く少女だった。

* * *

『あめのひのおるすばん』は物語絵本の世界に満足していなかったちひろが、やはり新しい絵本作りを目指していた至光社のオーナー編集者、武市八十雄とともにさまざまな表現を模索しながら制作した作品

まつもと・たけし 1951年東京生まれ。美術・絵本評論家、作家、ちひろ美術館（東京・安曇野）常任顧問。著書『いわさきちひろ 子どもへの愛に生きて』『花と子どもの画家 ちひろ』（10月刊行）ほか

「窓ガラスに絵をかく少女」

『あめのひのおるすばん』(至光社)から 1968年

である。この絵本でちひろは、にじみや水の流れという偶然性が作用する水彩の特徴に着目した。人間の技術では完全にはコントロールすることができない水が作り出す表情を活用することで、微妙な心の揺れを表現しようと考えた。背後のにじみは、まだ濡れている絵の具に別の色をさしながら複雑な調子を作っている。少女の上下にのびる水の痕跡は曇ったガラス窓に流れ落ちる水滴を感じさせるとともに、あふれ出そうな少女の涙をも暗示する。少女が描いた窓ガラスの絵は、実は、少女を描いた絵とは別の紙に描いたもので、この場面は印刷で合成して完成した。

『あめのひのおるすばん』は子どもの微妙に揺れ動く心理を、一枚一枚の絵で詩のように織りなす絵本となり、絵本の新たな可能性を切り開く一冊となった。と同時に、「窓ガラスに絵をかく少女」は、透明水彩のにじみを縦横に活用することによって、子どもの繊細な心を表現するちひろ独自の画風確立につながった作品である。

* いわさきちひろ生誕100年 Life展 「あそび Plapla」10月28日(日)まで、ちひろ美術館・東京(03)3995(0612)「みんないきている 谷川俊太郎」29日(土)~12月16日(日)、安曇野ちひろ美術館(02)61(62) 0772